なめとこ山の熊

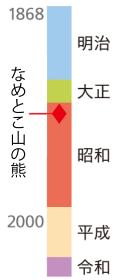
宮沢賢治

なめとこ山の熊のことならおもしろい。なめとこ山は大きな山だ。淵沢川はなめとこ山から出てくる。なめとこ山は一年のうちたいていの日は冷たい霧か雲かを吸ったり吐いたりしている。周りもみんな青黒いなまこ①や海坊主のような山だ。山のなかごろに大きな洞穴がからんとあいている。そこから淵沢川が、いきなり三百尺②ぐらいの滝になって、ひのきやいたや③の茂みの中をごうと落ちてくる。

中山街道はこの頃は誰も歩かないから、蕗やいたど④りがいっぱいに生えたり、牛が逃げて登らないように柵を道に立てたりしているけれども、そこをがさがさ三里⑤ばかり行くと向こうの方で風が山の頂を通っているような音がする。気をつけてそっちを見ると、なんだかわけのわからない白い細長いものが山を動いて落ちて煙を立てているのがわかる。それがなめとこ山の大空滝だ。そして昔はその辺には熊がごちゃごちゃいたそうだ。本当はなめとこ山も熊⑥の胆も私は自分で見たのではない。人から聞いたり考えたりしたことばかりだ。まちがっているかもしれないけれども私はそう思うのだ。とにかくなめとこ山の熊の胆は名高いものになっている。

腹の痛いのにも効けば傷も治る。鉛の湯の入り口になめとこ山の熊の胆ありという昔からの看板もかかっている。だからもう熊はなめとこ山で赤い舌をべろべろ吐いて谷を渡ったり、熊の子どもらが相撲をとっておしまいぽかぽか殴り合ったりしていることは確かだ。熊捕りの名人の淵沢小十郎がそれを片っ端から捕ったのだ。

淵沢小十郎は赤黒いごりごりしたおやじで、胴は小さな臼ぐらいはあったし、てのひらは北島の毘沙門さんの病気を治すための手形ぐらい大きく厚かった。小十郎は夏なら菩提樹⑧の皮でこさえたけら⑨を着てはんば⑩きを履き、生蕃⑪の使うような山刀とポルトガル伝来というような大きな重い鉄砲を持って、たくましい黄色な犬を連れて、なめとこ山からしどけ沢から三つ又からサッカイの山からマミ穴森から白沢から、まるで縦横に歩いた。木がいっぱい生えているから、谷を溯っているとまるで青黒いトンネルの中を行くようで、時にはぱっと緑と黄金色に明るくなることもあれば、そこら中が花が咲いたように日光が落ちていることもある。そこを小十郎が、まるで自分の座敷の中を歩いているというふうで、ゆっくりのっしのっしとやって行



① **なまこ**　なまこ綱棘皮動物の総称。海底に生息する。
② **三百尺**　一尺は約三〇・三センチメートル。
③ **いたや**　カエデ科の落葉高木。
④ **いたどり**　タデ科の多年草。
⑤ **三里**　一里は約三・九キロメートル。
⑥ **熊の胆**　熊の胆嚢を乾燥させた薬。
⑦ **毘沙門**　毘沙門天。仏教の四天王の一つ。
⑧ **菩提樹**　ぼだいじゅ。シナノキ科の落葉高木。マダは東北方言。
⑨ **けら**　東北地方の方言で蓑。
⑩ **はんばき**　脚絆の方言。足を保護するためにすねに巻く布。
⑪ **生蕃**　辺地に住み、中央の文化に服さない蛮族。